

「ピアノ弾き歌い」授業におけるワークシートの機能

—保育者養成課程での実践分析を通して—

小栗祐子

(東海学院大学人間関係学部子ども発達学科)

要 約

本研究の目的は、保育者養成課程における「ピアノ弾き歌い」授業で使用するワークシートには、どのような機能があるのかを明らかにすることである。筆者は拙稿(2018)¹⁾において、ピアノのグループレッスンではメンバーや指導者との対話や音楽の構成要素の知覚・感受の場、それらを楽譜と繋げる声かけなどが重要であることの示唆を得た。しかし一方で、そこでの思考や、対話と演奏との過程などが音とともに消えてしまい、学生自身に残りにくいという課題が残っていた。そこで、消えてしまう音や音楽、言葉のやりとり、その思考の過程などを可視化できるようにするためにワークシートを活用することとした。実践分析の結果、ワークシートには、イメージをつくり変えたりひろげたり、また交流時に思考を支え、そして学生が表現したいイメージを意識させ演奏につなげる機能があることが示唆された。

キーワード：保育者養成課程、ピアノ弾き歌い授業、ワークシート、イメージ

1. 研究の目的

保育者養成課程におけるピアノ指導については、グループレッスンの導入の有効性が様々報告されている。筆者も拙稿(2018)¹⁾において、グループレッスンにより学生が思考を働かせ試行錯誤しながら表現したいイメージを伝えるための技能を獲得していく姿を明らかにした。そこでは、グループのメンバーや筆者との対話や音楽の構成要素の知覚・感受の場、それらを楽譜と繋げる声かけなどが重要な手だてとなっていた。しかし一方で、そこで活発に行われたグループのメンバーや筆者との対話に表れた学生自身の思考や、対話と演奏を行ったり来たりしながら試行錯誤した価値ある過程が、わずかな楽譜への書き込み程度に残るのみで、その場限りのものとなって消えてしまうのではないかという課題が残っていた。また、他のグループメンバーにとっても共有の学びとして蓄積されていたかという課題も残った。そこで、ピアノを用いたグループレッスンにおいて、メンバーや筆者による対話(話すこと)で推進された学びの過程を、「書くこと」によって可視化することで、そこでの学びが見える形で蓄積されていき、いつでも振り返りが可能となりその後の自修やとつながっていかないと考え、ワークシートを活用することとした。

本研究の目的は、保育者養成課程でのグループによるピアノ弾き歌い授業におけるワークシートの機能を明らかにすることである。

2. 研究の方法

最初に、ワークシートについての関連研究などを概観し、「ピアノ弾き歌い」授業におけるワークシートの作成および授業構成の示唆を得る。

次に、得られた示唆を基に「ピアノ弾き歌い」授業に用いるワークシートを作成して授業を実践し、解釈に基づく質的な授業分析を行う。

最後に、保育者養成課程における「ピアノ弾き歌い」授業でのワークシートの機能について考察する。

なお、本研究に際し、分析する授業に参加する対象学生に対しては、本研究の趣旨・目的について事前に説明を行い、個人情報の保護をはかるためのデータ保管の徹底や、データの使用にあたっては個人が特定されないことなどの規定に則った倫理的配慮について、同意、了承を得た。さらに、本学の研究倫理委員会に申請を提出し承認を得ている。

3. 「ピアノ弾き歌い」授業におけるワークシート

「ピアノ弾き歌い」授業におけるワークシートに関する先行研究は、調べた限り見当たらなかったため「ピアノ弾き歌い」授業、「ワークシート」のそれぞれの観点から関連研究などを調べ、「ピアノ弾き歌い」授業におけるワークシート作成への示唆を得ることとする。

(1) 「ピアノ弾き歌い」授業について

松本晴子は、「保育者が子どもに歌を伝えるときに、保育者自身の興味や関心、考え方、感受性、イメージの広がりや創造性などが子どもに影響する」²⁾ことを指摘し、詩について、「保育者自身が言葉を明瞭にきれいに発音し、言葉そのものの味わいと内容を十分に感じ取っておく」³⁾ことの重要性を示している。

また、田中功一は、「ピアノ技術習得にだけでなく子どもの心に寄り添った表現技術の必要性」⁴⁾を述べ、ピアノ弾き歌い授業においても、幼稚園教育要領や保育所指針などにある領域「表現」の方向性を重視する。そして、領域「表現」の内容から、「様々な出来事の中で感動したことを伝え合う楽しさを味わう」、「自分のイメージを動きや言葉等で表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」の2点を挙げ、ピアノ弾き歌い授業においても、「子どもと対話しながら動きや言葉を伴う遊びの楽しさを含んだパフォーマンスを目指すべき」⁵⁾と言う。

以上のことから、ピアノ弾き歌いの授業として、決して技術習得に特化することなく、保育の文脈の中での位置づけを前提とした身体や言葉などを伴ったパフォーマンスを重視することが求められる。その際、学生自身がその楽曲の詩に興味関心をもち、その内容を十分に感じ取ったり考えたりすることが重要と考えられる。

(2) ワークシート

『音楽教育実践学事典』⁶⁾においては、ワークシートとは、「学習者が、授業中の活動の前後あるいは最中に、授業者からの問いに対して自分が考えたことや感じたこと気づいたこと等を記述する質問紙のこと」とある。そして、「学習者が自分自身の学びを自覚し、次に展開させることにねらいがある」としている。また、使用の利点として、「学習者の内的な思考・イメージ・感情を顕在化・可視化できることにより、それを用いて他者と相互交流することを通してコミュニケーションを促進させることが可能となること」とし、その際の留意点として、「言葉だけでなく描画を用いて記述できるような書式を工夫

することや「音楽表現活動とワークシートに記述し相互交流する活動を常に関連付けること」を挙げている。

また、関連研究を調べると、鉄口真理子⁷⁾のものがあった。鉄口は、学習状況を可視化するためのワークシートとして、〔知覚・感受のため〕と〔表現の工夫のため〕のワークシートについて述べ、知覚・感受したことをもとに、自分が伝えたいイメージを考え、それを表現の工夫につなげさせる場面での活用があるとする。そして、「教材曲の楽譜をワークシートにはり付けて書き込みができるようにする」ことで表現の工夫を書き留めておくことができるとする。

楽譜の使用については、中村愛⁸⁾が養成校でのピアノ指導において研究したものがあった。中村は、「楽譜」が学びを視覚的に明確にするとして、「音楽の諸要素の関連や、歌詞とのつながりを把握でき、知覚・感受の補助的な役割となること」や「対話で考えを相手に伝えるときにコミュニケーションを促す」役目をもつとする。

そして、対話で考えを相手に伝える点に関連し、島田郁子⁹⁾は、「ワークシートによる言語活動を指導場面で効果的に活用することによって、音楽の学びがより充実した主体的な学習になっていく」と指摘している。

以上のことから、ワークシート作成にあたっては、①言葉と描画を用いる項目があること、②伝えたいイメージが見えるようにできること、③歌詞も入った書き込みのできる楽譜を用いることが必要であることが読み取れる。さらに、ワークシートを用いる際には言語活動を伴わせ、楽譜の部分については、演奏再現のための道具に留めず、消えてなくなってしまう音、即ち音楽の諸要素や歌詞などを視覚的に捉えることで対話の媒介としての役割を与えることが重要となる。

(3) 「ピアノ弾き歌い」授業におけるワークシートの構想

上記の関連研究などを拠り所として、「ピアノ弾き歌い」授業におけるワークシート(以下、WSと記述する)を以下のように構成した。

項目1. 歌詞とその内容の描画

項目2. イメージマップ

項目3. 旋律とコード、歌詞の書かれた楽譜

なお、これらの項目で構成したWSを用いて授業を構成するに当たり、音楽表現活動とワークシートに記述し相互交流する活動を表1に示すように常に関連付ける。その際の相互交流においては、言語活動を伴わせることに留意することとした。

表 1 活動で使用するワークシートの項目

| 学生の主な活動内容 | ワークシートの使用 |
|-----------------------------|------------------------|
| ①演奏する。 | |
| ②歌詞を書き、その内容を描画し、グループで交流する。 | 項目 1. に記入し、交流に使用する。 |
| ③個々人でイメージマップをつくり、グループで交流する。 | 項目 2. に記入し、交流に使用する。 |
| ④演奏しながら工夫を考え、楽譜に書き、演奏をする | 項目 3. 楽譜に記入し、見ながら演奏する。 |
| ⑤イメージについて、再度振り返り交流する。 | 項目 1・2 を見返す。楽譜に加筆する。 |
| ⑥再度演奏をする | 項目 3. 楽譜を見ながら演奏する。 |

4. 実践授業の分析

(1) 実践授業の概要

- 科目名 : ソルフェージュ I (選択科目)
- 対象者 : T 大学短期大学部 2 年生 4 名と教員(筆者)
- 実施日時: 平成 29 年 4 月~7 月全 7 回

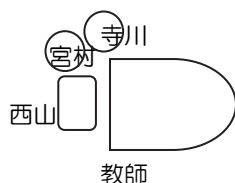
* 授業は集団演習とグループレッスンを隔週で設定されている (A 組が集団演習の週は、B 組がグループレッスンとなる)。その一つの組を 2 つのグループに分け、2 人の教員がそれぞれのグループを担当している。

- 課題曲 : 主に幼児向けの歌の弾き歌い曲 (共通課題曲と自由選択曲)、ピアノ曲 (数回)
- (共通課題曲) ・ ・ 学生と相談の上、決めている。

《こいのぼり》、《かたつむり》、《かえるのがっしょう》、《あめふりくまのこ》、《まつぼっくり》

- レッスン室の環境構成

: 演奏をしない学生は、対話しやすいよう演奏者の表情や手、楽譜を見ることができる位置に座り、演奏を聴いて発言したり一緒に歌ったりする。



(2) 分析対象と分析の視点

本研究では、全 7 回のピアノを用いた弾き歌い曲のグループレッスン授業のうち、第 4 回目 (5/17) の授業を取り上げる。共通課題曲は、《あめふりくまのこ》である。分析対象は、A 組 3 名の学生 (当日は一人欠席であったため) と筆者との活動のビデオによる録画記録と WS の記述記録、交流に用いたホワイトボードの記述記録、最終授業での質問紙による回答記録とする。

分析にあたっては、西山を中心に取り上げた。西山を取り上げた理由は、西山が本授業において主にピアノの演奏を担当したため、演奏についての映像記録が残って

いることと、映像記録や WS など本研究に関わる分析資料が多く残っていたためである。そして、西村の WS や発言、行動、演奏に変化の見られた場面を抽出し、以下の視点で分析する。なお、名前は全て仮名である。

[視点 a] WS はどのように用いられたか。

[視点 b] それはどのような要因からと推察できるか。

(3) 分析

【場面 1】歌詞を書きその詩から描画し、それをもとに交流する場面

まず個々人でワークシートに歌詞を書き、それをもとに描画する。そして、WS を持ち寄り、筆者も含めて歌詞の情景について交流する。

[視点 a1]

グループで交流する前の西山の WS には、中央にくまが立っており、雨がぼつぼつ降っている様子が描画されていた。このような「雨」と「くま」がイメージの大枠という捉えは、筆者を含めすべての学生にあった。しかし、宮村の WS には、「くま」と「小川」、そこに「魚」が描かれており、絵の得意さからもグループメンバーの注目が集まった。そして宮村は、(4 宮村~7 宮村)「**雨が降ってきて川ができた。川ができてくまが走ってきて、魚を探す。(中略)魚がないから、しょうがないから水でも飲んで・・・でもやっぱ諦められなくて魚を、・・・探す?ん・・・この辺がちょっとよくわからん、探して、雨が止まないから、傘さしながら魚を探す**」(逐語記録の太字部分参照)というように、くまが魚を探している情景とその心情という捉えの解釈を語った。これによって筆者も含めたグループのメンバーの考えに変化が起こり、イメージの大枠は「くま」と「魚」に移行していった。西山はその時点で、新たに WS に加筆し、絵にあったくまに魚を持たせ、もう片方の手には枝のような棒を描き入れた(図 1)。

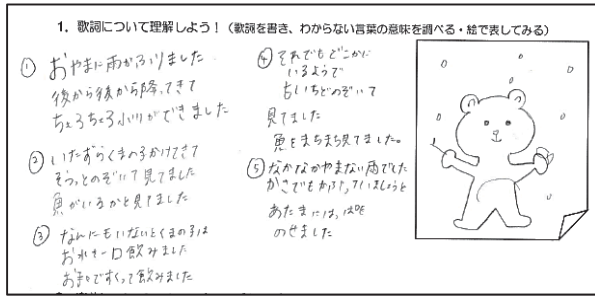


図1 西山 WS の項目 1(歌詞と描画)

[視点 b1]

これは、歌詞について描画してみたことによって、詩の解釈がより具体的になり、さらに宮村の発言によって細かな情景や思いなどがグループのメンバーに共有されたことが要因と推察できる。

[視点 a2]

西山は、上記にある宮村の発言の間もずっと自分のWSをじっくりと見て聞いていた。そして、(西山8)「何かに納得するように頷き)ふーん」(逐語記録の下線部分)と反応した。さらに、交流中は、視線を自分のWSと発言者を何度も行き来させ、発言についてWSを覗き込むように見て確認し考える姿も見られた。そして、(17 宮村)の発言辺りから自分のWSに加筆を始めた。また発言にあたっては、WSを指しながら意見を述べたり自分のWSを提示したりしながら意見を交流したりしていた。

[視点 b2]

これらの要因として考えられるのは、自分で考えたことが対話だけで消えてしまうことなく、文字や絵として残っていることで、それを根拠に発言しやすかったり、他者の意見を聞きながら自分と比べて考えることができたり、他者の意見を視覚的にも確認できたことであろう。また、詩の文字の奥にある情景や心情などを描画によって具体的に視覚化したことも要因と考えられる。

【場面 2】楽曲についてイメージマップを交流する場面

学生はまず、個々人でイメージマップを記述した。そして、それを持ち寄りグループメンバーで記述内容やその理由などを交流していった。交流にあたっては、筆者がコーディネートする形で A3 サイズのホワイトボードを用いてグループメンバーの意見をまとめていった(図2参照)。

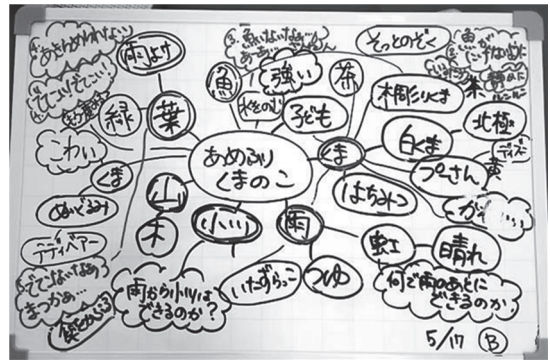


図2 イメージマップを交流したホワイトボード

[視点 a]

西山のイメージマップ(図3)には、交流前は、太丸で囲んだ部分のみであった。そして、交流の中で、以下のようにイメージマップに加筆していった。☁️にあるのは、各曲番でのくまの行動や心情である。上記図2にある共有のためのホワイトボードに筆者が書いたものをそのまま書くだけでなく、自分の考えによってまとめていることがわかる。

そして、最終授業の質問紙において西山は、「イメージできる幅が広がるので、今まで思わなかったイメージをして歌うことができたのでよかった」と振り返った。また、「グループのメンバーと交流することでそんな考えもあったんだと気づくことがたくさんあった」、「自分だけのイメージだと狭く感じたが、グループで交流できると色々なことを聞いて想像が広がった。」、「一つの言葉からたくさん広げられるし、交流して新たな知識を取り入れることができた」などが記述された。

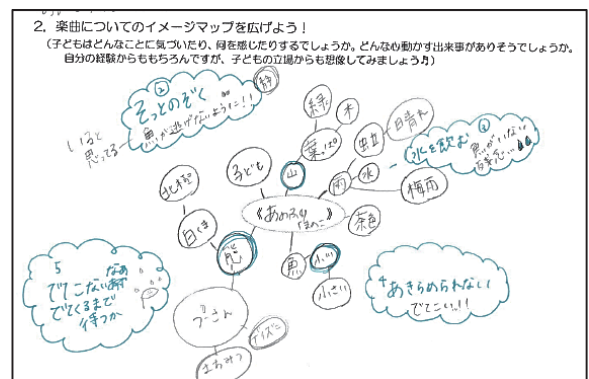


図3 西山 WS の項目 2(イメージマップ)

[視点 b]

これは、一度、自分で考えてイメージマップを書いたその後に、他の学生らとの交流の機会をもったため、自分のイメージからの拡がりにより明確に意識されることとなったのではないかと推察できる。

【場面3】交流を支えに弾いてみる場面

イメージマップの交流で1~5番それぞれについてのイメージの共有が行われ、それらの内容がホワイトボードや個人人のWSに記述された。そこで、このイメージを伝えられるよう演奏してみる事となった。

イメージマップを用いて交流されたイメージは以下のようにまとめられる。

- 1番：情景描写
- 2番：魚が逃げないように静かにしておこう。(魚はいると思っている) ルンルンなテンション。
- 3番：魚がいないなあ、ああ～残念だな、(がっかりでテンション下がる。)
- 4番：諦められない！出てきてほしいなあ(テンションぐっと上がる。)
- 5番：出てこないからもう少し待つかあ。帰らないぞ！(テンションは下がりはない。)

西山の演奏は、淡々と弾いているようで、交流したイメージを伝えるように工夫されているようにはほとんど聴こえなかった。唯一、2番の♪そっとのぞいてみましたを弱めに弾き、歌う2名の学生も弱めに歌った。そこで、楽譜を配布し、その部分についてどう工夫するのかについて楽譜に書き込みながら交流した。♪そっとのぞいてみましたの部分の工夫は強弱であったので、楽曲全体を通して強弱に注目して交流が進んだ。

【視点a】

イメージを伝える演奏の工夫を楽譜に書き込みながら交流した主なものは強弱についてであった。それぞれをまとめると以下のものであった。

- 2番：♪見ました “期待”のクレシェンド。
- 3番：いなくて悲しい感じだから、声を弱く。(強弱記号をつけるならmp)
- 4番：出てこい！ 3番よりも期待がある。声を強く。(強弱記号をつけるならmf)
- 5番：f。魚を捕まえるまで帰らんぞ！（強い意志）だんだん強く（最初はどうかかなと迷っているけど、傘かぶってやっぱりまだ帰らんぞ！）

そして、西山はこれらを楽譜に書き込み(図4)、その楽譜を譜面台において見ながら演奏した。演奏には強弱の変化がよくあらわれ、当初の演奏から大きな変化が見

られた。西山自身も「(イメージに合わせるのは)難しいけど表情をつけたほうが楽しい」とイメージを音で表現できた実感を感想として述べた。

あめふりくまのこ
鶴見正夫作詞 湯山昭作曲

1. おやまにあめがふりました
2. い「にす」らくまのこかけてきて
3. なんにもいばいとくまのこは
4. そろそろとこかにいるように
5. ちいさなこまのこあめぞし

あとかからあとかからふってきて
2. のぞいてみてました
3. おおすもはとちのみましす

1. ちよろちよろおがわができました
2. さかなが11るかどみてました
3. おててぞ可し。このみました
4. げがなをまちまちみてました
5. あてまは。ほをのせました

図4 西山WSの項目3(楽譜)

【視点b】

これは、楽譜にイメージや工夫を自分で自分の言葉で書きこんだことで、イメージマップに書いたことを再度確かめ意識することにつながったことが要因と考えられる。さらに、演奏の時に見ている楽譜とともに、イメージや工夫が見て取れることも意識を高める要因であったと考えられる。

5. 分析結果

分析より、WSは以下のように働いたと考えられる。

- イメージをつくり変えたり広げたりする。
- 交流時に思考を支える。
- 表現したいイメージを意識させ演奏につなげる。

言葉での交流やイメージWSによって、学生は自身の考えが視覚的に捉えられるようになり、文字や絵にすることではより具体的にもなると考えられる。さらに、それが他者との交流によってより広がることもわかった。また、自分で書くということは、自分の思考を確かめ、意識することにつながり、それを認識して他者とも考えを交流させて考えを発展させることにもなると考えられる。

6. 考察と今後の課題

本研究の目的は、保育者養成課程でのグループによる「ピアノ弾き歌い」授業におけるワークシートの機能を明らかにすることであった。ワークシートはそれ自体が単体でというよりも、そこに他者との言語を介した交流や表現活動との行き来があつてこそ多くの役割を果たすことが確認できた。

筆者は、保育者養成課程での授業の文脈は、保育現場の状況を踏まえたものであるべきと考えている。弾き歌いやピアノ演奏においても、それが目的ではなく、手段として子どもの音楽表現活動をいかに展開できるかという視点が重要ではないだろうか。西山の振り返りシートには、保育現場での弾き歌い活動に対する意識の変化があったという記述や、「歌う側はどんな気持ちで歌うとその曲を表現できるのか、歌に出てくる主人公になりきれたりするので子どもたちも楽しめると思った。」という記述があり、この授業における歌詞からのイメージづくりの部分が大きく印象付けられていることがわかる。また、本実践では、イメージマップの記述を交流している時、学生らのやり取りのなかに、子どもと保育者が対話するような保育場面が想起された。このこともWSを用いた対話による活動の大きな産物であった。

これまでの筆者の担当した授業をふり返ると、イメージしたことをいかに技能を用いて表現するか、と言う部分に重きを置いていたように思う。しかし、特に子どものうたの「ピアノ弾き歌い」授業に関しては、まずは歌詞の理解から丁寧に畑を耕し、学生が自ら思考することで自分自身のイメージを意識し、広い視野で表現活動を考えることのできるような授業づくりをさらに検討していきたい。

今後の課題は、楽譜の内容の検討と授業構成である。楽譜については、書き込みをやすく演奏もしやすい、見やすいものにするために、旋律や伴奏、歌詞などをどのくらいどのように入れるのかということである。そして、授業構成については、おおよその見通しがついた内容について、限られた時間で学びが実感できるような時間配分や環境構成などを考えていきたい。

注

- 1) 小栗祐子(2018)「保育者養成課程でのピアノグループレッスンにおける学生Aの変容過程」『学校音楽教育実践論集』第2巻, 日本学校音楽教育実践学会, pp. 162-163
- 2) 松本晴子(2010)「手遊び歌と弾き歌いをどのようにうたうかー保育者養成における指導への提言」『音楽教育実践ジャーナル』日本音楽教育学会, p. 99
- 3) 同上書, p. 97
- 4) 田中功一(2016)「保育者養成における『保育内容表現』に基づいた左手のみによるピアノ伴奏の一考察」『立教女学院短期大学紀要第48号』p. 112
- 5) 同上書, p. 112
- 6) 横山真理(2018)「ワークシート」『音楽教育実践学事典』日本学校音楽教育実践学会編, 音楽之友社, p. 82
- 7) 鉄口真理子(2015)「3. 指導と評価の一体化のためのワークシート」『音楽科授業の理論と実践ー生成の原理による授業の展開ー』あいり出版, pp. 111-119
- 8) 中村愛(2015)「音楽科の指導内容4側面の相互関連における楽譜の取扱いー教員養成校の対話に代るピアノグループレッスンー」『学校音楽教育研究』第19巻, 日本学校音楽教育実践学会, pp. 210-211
- 9) 島田郁子(2013)「音楽の知覚と感受を呼び起こす器楽合奏指導の工夫ーワークシートによる言語活動を手立てとしてー」『学校音楽教育研究』第17巻, 日本学校音楽教育実践学会, pp. 191-192

資料<逐語記録抜粋>

【場面1】《あめふりくまのこ》歌詞を書き描画し、それをもとに交流する

| | 発言や行動 | WSをどう用いているか |
|-------|---|-------------------------------------|
| 1T | 情景を確認していくと、最初は「お山に雨が降りました」だね 山があって、雨が降っている。であとからあとからふってきて、そこに？ | (3名)メンバーのWSを見たり、自分のWSを見る。 |
| 2 宮村 | くまが走ってきて、魚を探す | WSを見ながら発言する。 |
| 3 西山 | (何かに疑問に思ったかのように) ふーん | 自分のWSを見る。 |
| 4 寺川 | え、違う、、それ2番。 | 宮村のWSを見ながら発言する |
| 4 宮村 | (考えて) あーっ、あーそう、 降ってきて川ができた。川ができてくまが走ってきて、魚を探す。 | WSを指しながら発言する。 (寺川・西山)宮村のWSを覗き込む。 |
| 5T | それで？ | |
| 6 宮村 | で、魚がないから、しょうがないから水でも飲んで・・・ | 自分のWSを見ながら発言する。 |
| 7 宮村 | で、でもやっぱ諦められなくて魚を、・・・探す？ん・・・この辺がちょっとよくわからん、探して、雨が止まないから、傘さしながら魚を探す | <u>(西山)自分のWSをじっくり見る。</u> |
| 8 西山 | <u>(何かに納得するように頷き) ふーん</u> | |
| 9T | つまり、《あめふりくまのこ》ってこの曲のイメージって、雨とくまって感じじゃなかった？ | (寺川)自分のWSとTを行き来する。 |
| 10 寺川 | (Tをみつめ考えて) うん、名前的に | |
| 11T | うん、だから、なんか、雨とくまの映像があって(西山のWSを指しながら) あーこうね、 | |
| 12T | 今、(宮村の絵を指しながら) この全部歌詞を見てみて、重要なものがあるよね！？もっと。 | <u>(メンバー)宮村のWSを覗き込む。</u> |
| 13 宮村 | 小川、魚 | |
| 14T | 小川、魚ね | |
| 15 西山 | いたずら | <u>自分のWSを指して発言する。</u> |
| 16T | そうだよ、いたずらって言うくまの性格も出てきたし、で、絶対に欠かせないのが魚だよ、くまはいったい何をしに来ているのか、というと、雨で遊んでいるわけではないんだよ ね 何やってる？ | |
| 17 宮村 | くまさん・・・(歌詞をなんども見ながら) くまさん・・・ | <u>(西山)発言を聴きながらWSに魚を描き入れる。</u> |
| 18 西山 | そうそう、何かちょっとそこに、くまさんと？ | |
| 19 宮村 | くまさんと・・・ | |
| 20 西山 | さかな？！ | <u>WSを指しながら発言する。</u> |
| 21T | あ、(西山のWSを指して)取ったね！(笑いながら)捕まえたね、このくまは。(メンバーは西山のWSを見ながら同調して笑う) | (メンバー)西山のWSに注目する。 |
| 22 寺川 | (嬉しそうに) 魚にぎってる！ | 西山のWSを指して発言。 |
| 23T | ゲットして喜んで | |
| 24T | これって、魚がすごく重要なんだね。くまは魚が欲しくて | (寺川)WSに魚を描き入れる。 |
| 25T | (みんな何度も頷いている。) | <u>(メンバー)自分のWSを見て頷く。</u> |
| 26T | くまは魚が欲しくて | |
| 27 寺川 | 魚をやっぱ食べたかったんじゃない | |
| 28T | 《あめふりくまのこ》っていうと、雨が好きなくまとか | |
| 29 宮村 | うんうん | WSを見ながら何度も頷く。 |
| 30T | なんかそういうイメージだったけど、今、しっかり読んでみると全然違うってことがよくわかった。 | |

The function of the worksheet in the class of “Singing with playing the
piano”

: Through the analysis of a practice in the Nursery Teacher Training
Course

OGURI Yuko

以上